

広畑和志・寺山和雄 編集, 辻 陽雄 編集協力

標準整形外科学 第4版

(B5判 700頁 7,725円(税込) 1990年 医学書院 刊)

竹光 義治

(旭川医科大学整形外科)

昭和54年に本書の初版が発行されて以来、10年間、一貫して学生用教科書として愛用されてきた『標準整形外科学』が、このたび装いも新たに改訂第4版が出版された。『標準整形外科学』は経験豊かな16名の教授が各々専門分野を分担し、練りに練って著作されたと聞いているが、学生用教科書としてはもちろん、上級研修医の知識整理用としても教科書としては秀逸のものと思う。内容の充実性と、最近の進歩を常に取り入れた斬新さは確かにセールスポイントである。その内容をみると

1) 広範な整形外科疾患全般はもとより、関連領域についても、現段階での基本的な minimum requirement から、知っていて欲しい新知識までまんべんなく盛り込まれ、内容が充実している。

2) よく整理され実用的である。第1章：骨関節、神経筋などの基礎科学、第2章：整形外科診断学、第3章：治療学、第4章：炎症や腫瘍変性などの疾患総論、第5章：各部の臨床解剖と機能を含めた疾患各論、第6章：外傷学、第7章：整形外科とリハビリテーション、という構成が偏りなく、

系統的に記述されている。まず学生は1年間にこの教科書でじっくり知識と考え方を修得した後、2年目の臨床実習では患者さんを前にして、その自覚的症状の引き出し方から始まり、正しい診断に向かってどうアプローチしていくかを教えられる。ブルーページはこのための糸口として役立つ。すなわち1：頸肩腕痛、2：頸部の変形と運動制限、3：腰痛座骨神経痛、4：脊柱変形・運動制限、5：背部痛、6：脊髄麻痺、7：手指のしびれ麻痺、8～16：肩関節から各部関節等の痛み、18：跛行、歩容異常まで、日常診療で見られる大部分の症状がこの「主訴からみた鑑別診断」の中に網羅されている。縦糸横糸両面から攻められるように親切に編集され、「考える整形外科」を提供することに重点を置いたとされる編集者の意図がよく表れている。

3) 整形外科に重要な画像、写真、図版による系統的な解説がきわめて多く、よくできている。その内容は必要性をほぼ網羅しており、しかも up-to-date で、視覚を通して入る知識の量はきわめて大きく、若者たちには馴染みやす

い。ことに病理診断の解説ではカラー写真を多く掲載し、興味と印象を深めている。現在、認定医試験準備に必要な組織診断の見方も大半この中から学ぶことができるであろう。また、MRIなど近年の新しい画像診断も追加され、分かりやすく内容を豊かにしている。

学生たちの評判もよい。ただ、今後のため学生たちの感想を聞くと、①どの疾患、どの項目が頻度が高く重要なのか分かりにくい、②突然難しい専門用語が英語で出てくることがあるので、欄外に説明が欲しい、③1つの疾患が複数の項目に同じような内容で出ていることがあるのでまとめられないものか、などが聞かれた。確かに初年度の学生にとっては詳し過ぎ、encyclopedic などところもあるが、ポイントを強調し、重要性の順を教え、難しい内容を分かりやすく理解させることは教育者側の選択に任せられ、腕の見せどころではないかと思う。その点、教える側にとっても逆に使いやすい教科書といえるかも知れない。

本書を手にとると、自分が書いた本でもないのに何か充足感というか安心感を感じるのは、永年使い馴れたということだけではないと思う。そこには10年に4回も改訂してきた広畑、寺山、故井上駿一教授の編集陣、編集協力の辻教授、分担執筆者の皆さんの愛情と熱意が感じられるからであろう。今後もこの編集方針を貫かれるよう、ご発展を祈ってやまない。